



シンデレラとお友達の話

神戸大学 経済経営研究所
准教授 遠藤 貴宏

『シンデレラ』という童話の中で、同名の主人公は大きな変容を遂げる。見向きもされなかった状態から、誰もが振り返るような存在へ。「シンデレラ」になった、グラッパ。そのプロセスを分析した論文。最近読んだ論文の中で抜群に面白いネタを扱っていると思った。

グラッパというのはイタリアのお酒。昔と今で込められた意味が大きく変容した。もともと、売りに出されるようなお酒ではなく、「わざわざ高いお金を払って飲む」ことは皆無だったという。今では、いろんな国で、(結構な)お金を払ってでも飲みたい人がざらにいるお酒、という地位を得ている。

(北米の)クジラとホエールウォッチングの関係性を見ている論文。これはかなり前に読んだものだけでも、グラッパの時と同じようにとても興味深いと思った。以来、ずっと脳裏に焼き付いている。

恐ろしい海のモンスターから海のお友達へ。『モービーディック』という映画の中で、クジラは海の猛獣として描かれていた。それがある時点で海のお友達になった(『フリーウィリー』という映画など)。猛獣に会いに行こうというのはややマニアックな興味だ。だが、「海のお友達に会いに行こう」というのはもっと需要があったそう。ということで、海で泳ぐクジラを見に行くという、ホエールウォッチング観光が(北米で)産業として登場し、成立したという。

さて、グラッパとクジラの話の関係性。グラッパの話と同様に、クジラに込められた意味が大きく変わった、というところで両者は共通している。(もっとも両者にはある意味で大きな隔たりがあるかもしれない。というのも、グラッパは日本でもかなり受容されているようだ。しかし、クジラに込められた意味といった場合、日本の状況と北米のそれとは結構「温度差」があるかもしれない。)

なんでこういう「意味が変容する」話が好きなのだろうか。何かに込められた意味を変え

ていくのはとても難しいと思う。一度定着してしまった意味はそのまま定着していることがほとんどなのかもしれない。そもそも、そんなに頻繁に意味が変わっていたら、安心して社会生活が送れないだろう。

だからこそ、「込められた意味は変わりうる」ということを示している点で面白い。さらに、意味が変わったことで、今まではできなかったことができるようになった、という点が勇気を与えてくれるように自分には見える。グラッパの場合でいえばイタリア国内での消費のされ方も変わっただろうし、輸出されるようになったということなどが挙げられるだろう。クジラの場合でいえば、新しい産業の創出である。